

新潟市乳児期家庭教育「ゆりかご学級」 における当事者研究の実践報告

渡 邊 彩

はじめに

本研究では、乳児の母親とおこなった「当事者研究」という取り組み—乳児期家庭教育の実践事例—を紹介する。

当事者研究は、2001年に北海道の「浦河べてるの家」で誕生した技法である。この技法は当初、統合失調症を中心とする精神障害のある人々の間で行われていたが、薬物依存症、発達障害、双極性障害といった障害のある人々においてもおこなわれ、さらに子ども、女性、大学生といった「生きづらさ」を抱える人々の間でも実践され始めている。当事者研究の特徴としては、当事者が物語ることによる公開性、パターン化された体験への気づきとその体験への言葉の付与、そして、言葉を他者と分かち合う場の体験が挙げられる¹。

ここでの当事者とは、苦勞・困りごとに直面し、これを自覚している人物を指す。そして、本稿では、苦勞・困りごとを、社会とのミスマッチ・摩擦によって生じる事柄として捉える。こう捉えるのは、障害を「個人に宿る」と観る医学モデルではなく、障害を個人と社会との関係から生じると観る社会モデルを採るからである。

今回、乳児の母親との当事者研究の実践を試みた理由として、乳児の母親たちの社会的・心理的な状況が挙げられる。妊産婦及び乳児の母親は、産前・産後を通して社会的に孤立しがちであり、独自の「生きづらさ」を抱える環境に置かれている。筆者は、2020年の3月から「パパママ銭湯」という、施設付設型の乳児の一時預かりサービスを開始し、現在も活動を継続している。そこで出会う乳児の母親からは、育児の困りごと、パートナーとの子育てと家事の分担に関する悩み、母親自身の就業復帰への不安の声が聞かれた。こうした困りごと・悩み・不安は、社会とのミスマッチ・摩擦によって引き起こされていることも少なくない。しかし、当事者自身が社会の規範を内面化し、子育ての困難さの原因を「自分の能力不足」と捉えて自責の念を抱いている場合がある。あるいは、「理想の物語」²と現実とのギャップに苦しんでいる人々もいる。

このような状況にある乳児の母親たちが当事者研究を用いることで、変えられない自己のパターンを慎重に探り、「『等身大の自分』を発見する」³ことができるのではないかと考えた。また、自分と類似した他者とともに予期（知識）を更新するプロセス自体が、ピア・カウンセリングの場として機能する可能性もある。

乳児の母親が抱えている悩み・困りごとを解決するまではいかずとも、権利感覚を「自らの手に取り戻し」、自らが内面化していた規範・知識を更新していくことができるのではないかと考えた。また、乳児の母親たちはどのようにして「生きづらさ」を抱えてしまうのかを明らかにしたいと思い、本実践をおこなうこととした。具体的には、「2019年版当事者研究ワークシート」⁴を用いて、乳児（3か月～5か月）の母親たちとの当事者研究をおこない、ふりかえりアンケートと当事者研究ワークシートを分析対象とする。本研究では、これらの分析を通して、乳児期（3か月～5か月）の母親たちが抱える悩み・心配事を明らかにするとともに、どのような支援を必要としているのかについて考察する。

1 新潟市中央区の乳児期家庭教育学級の実践

(1) 乳児期家庭教育学級の概要

① ゆりかご学級の全体構成と概要

新潟市では乳児期の子どもと親を対象とする乳児期家庭教育学級が1975年（昭和50年）5月から開始され、「ゆりかご学級」と名付けられている。新潟市内の各区の公民館が企画・運営し、対象者はおおよそ3か月ごとの出産時期ごとに分けて募集されている。講座の実施時間には別室に保育室が設けられており、母子が分離した形で講座が進められている。

今回実施したゆりかご学級は、新潟市の中央区公民館で実施した講座である。主催する公民館の職員からは、「核家族化・少子化に加えてコロナ禍で、孤立した子育てをしている乳児を子育てする親に、仲間づくりの機会を提供し、親として必要な知識を学ぶ場とする」ことが目的として示されていた。また、目標としては以下の4つが挙げられていた（傍線部、筆者加筆）。

- (a) 子育てや家族関係に関する不安や悩みを気軽に話せる（イライラやモヤモヤを言語化して周囲と共有する）。
- (b) ジェンダー規範に気づき、「らしさ」や「べき」にとらわれない考え方を知る。
- (c) 自分の生き方や価値観について新しい気づきを得る。
- (d) 一人で子育てを抱え込むことなく、周囲に頼れる場所があることを知る。

こうした目標を達成するためにプログラムは図1のように構成されていた。

全4回で構成されており、このうち第1・第4回は参加者同士の関係性を作ることに重きが置かれている。目標としては先に挙げた(a)・(d)を達成するための内容になっている。一方、第2回・第3回は「親として」がテーマ名になっている。第2回では(b)の目標に対応するようなジェンダー観、アンコンシャス・バイアスに関する講話が実施された。これを受けて、第3回では(c)の目標を達成しつつ(d)

の目標である悩みごとを抱え込まない環境を体験することを意図して、「当事者研究ワークシート」を用いながら対話する90分のプログラムを計画・実施した。

② 参加者・実施日・会場構成・プログラムの時間

今回の参加者数は10名であり、2022年1月から3月生まれ（生後3か月～5か月）の乳児の母親である。実施日時は2022年6月29日（水）の午前10時から12時であった。

会場は、新潟市中央公民館の403号室にて実施した。筆者が担当したプログラム自体は、10時10分から11時40分までの90分間であった。



図1 令和4年度（2022年度）新潟市中央公民館ゆりかご学級のチラシ

③ 事前アンケートの実施と結果

参加者に対しては中央公民館が事前に出産経験・就業状態・家族との同居・悩み事と心配事の4項目について事前アンケートを取った。提出者は9名であった。

【出産経験】 9名のうち7名が第1子、2名が第2子の母親であった。

【就業状態】 9名のうち5名が育休中で、4名が就業していないとの回答であった。

【家族との同居】 8名が同居しておらず、同居しているものは1名のみであった。

【悩んでいること・心配なこと】

悩んでいること・心配なことについては右の表1の通りである。内容を見ると、3～5ヶ月の乳児の母親ということで離乳食に関する記述(A, B)が2つ示されている。他方、母親自身の身体的負担(C)、困りごとの相談先(D)、家族との良好な関係性維持の困難さ(E, F)、週末の過

表1 事前アンケートの回答内容—課題名

記号	回答内容
A	離乳食の進め方
B	離乳食を始めるタイミング
C	日中布団で寝なくなり、抱っこおんぶが負担
D	困ったときにどこへ相談したらよいか
E	夫も協力的だが、自分に余裕がなく、喧嘩になる
F	子どもたち相手にすぐ余裕がなくなってしまう
G	週末の過ごし方
H	きょうだいで生活パターンが違うため、どうしたらいいか
I	仕事復帰に向けての話を聞きたい

ごし方 (G)、きょうだい間の生活リズムの違い (H)、母親自身の就業復帰への見通し (I) といった記述があった。乳児に関する事柄だけでなく、家族との関係性維持、自分自身のキャリア形成、身体的健康、社会的資源とのつながりといった事柄も悩み・心配事として生じてくることが示されている。

- ④ 第2回「いま親として 子育て中も自分らしくいるために」のふりかえりの記述結果
 本回の前の回となる第2回を終えたのちの、参加者のふりかえりアンケートは、下の表2の通りである。回答を見ると、10人中、3人が「自分らしく」、6人が「自分」という用語が用いられている。また、B、C、G、Iにおいては、自分に対する思い込み・ステイグマに関する記述が見られた。

表2 第2回実施後のふりかえりの記述

記号	回答内容
A	子育て中も自分らしくいるためにということを改めて考えることができ、自分のしたいことを優先することが子どもにとってもよいことなのだなと思ったので笑顔で子育てを楽しみたいと思った。
B	自分はあまり差別や偏見をしないほうだと思っていたけど、無意識にしていたのだなと受け止めました。人生はアップデートの連続。同じ日なんてない。自分を大切に、子ども大切にしていこうと思いました。
C	自分の中にもママはこうあるべきだという考えがあるな…と思った。
D	少しでも自分について考える時間を毎日とれればいいなあ…
E	母親である前に一人の人間なんだということをすごく感じられました。自分らしく子育てをしていきたいなと思いました。
F	思い込みで自分をつぶして我慢をしすぎるのではなくもっと自分の好きなこと自分の時間を大切にすることが大切なんだと思いました。
G	罪悪感という言葉やアンコンシャスバイアスなどああそうだなと納得することがあって、勉強になったと同時にスッキリしました。
H	我慢して頑張りすぎると夫とも喧嘩になってしまい悪循環…もっと自分らしく過ごしていきたいなと思えました！
I	自分の性別への思い込みが思ったよりあることに驚きました。子どものお世話もどちらかできるほうがすばいいと考えると必然的に私がすることになります。が、そのことに対して違和感を感じました。罪悪感と思わずに自分のことを少し優先してもいいんだなと思いました。
J	自分について考えることができた。産前と産後でかなり生活が変わったことを実感した。でも変わったのは自分だけじゃないことが分かった。
K	「自分らしく」難しいけど楽しくできたらと思いました。

（２） 当事者研究ワークシートを用いた実践—学習目標・全体プログラム・進め方

① 第３回講座「親としてⅡ家族とのコミュニケーション・自分の生き方を考える」の学習目標

上記のふりかえりアンケートの記述を受けて、筆者が担当した第３回では、次の２点を目標とした。

- ・いま抱えている困りごと・苦勞・気になる自分の特徴・クセについて「語り」「聞く」ことで、真の課題に気づき、課題解決の方途を見出す。
- ・「当事者研究」—自らの悩み・困りごとを正直に語り、他者とのつながりを感じるなかで、等身大の自分に気づく。

講座は下の表３のようにすすめた。初めに、参加者同士の緊張感をほぐし、本日の講座後のイメージを描くためのアイスブレイクを実施した。具体的には、A4用紙に受講後の自分の姿をイメージして文字・絵を描き、これを全体に発表するという活動である。

この後、母親が５か月以降の乳児・幼児の発育・発達についての見通しがもてるよう、「遊びの効果」「言葉の発達と脳の発達」「情緒的なつながりの形成と『人見知り』」についての講話を行った。特に生後５か月以降においては後追いが始まる時期であるため、母親が休息し個人の時間を意識的に設けることが重要であり、積極的に「パパママ銭湯」⁵のような人的資源・サービスを活用するように伝えた。

これを踏まえて、今回のテーマは自分を研究することであると伝え、「当事者研究ワークシート」を用いることを参加者と確認した後に進めていった。

表３ 第３回の講座の時間配分・活動内容・使用備品と留意点

時刻	参加者の活動内容	使用備品と留意点
10:10	<p>◎ アイスブレイク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の講座終了後の変化・近況について、ペアで聞き合う。 ・受講後に自分になりたい姿をイメージしてイラスト・文字で描く。その後、参加者同士で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネームホルダー×10個 ・画板×10枚 ・A4用紙×10枚 ・プロッキー×2ケース *黄色・オレンジは見えにくい ため予め抜いておく。 ・椅子×11個 ・参加者が互いの顔を見やすいように部屋の中央に椅子を円形状に配置する。

10:20	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 小講義「揺れの中で育つということ」 ・乳幼児の「遊び」「ことば」の発達と「愛着と不安」についての話を聞く。 ・当事者研究の進め方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机×5台 ・プロジェクター 1台 ・パソコン 1台 ・当事者研究ワークシート (1～3ページ)
10:35	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 当事者研究をする。 ○ 研究テーマを決める。 ・各自ワークシートに記入し、全員が書き終わった後に全体の中で発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆記用具 各自
10:45	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苦労のエピソードを探る。 ・ペアになってインタビュー形式で進める。一人10分ずつ聞き合う。できるだけ具体的に思い浮かべられるように質問する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・詰問にならないようにすることと、起きた時の気持ち、時間、場所を具体的に探るように声をかける。 ・テーマが変わっていてもかまわないことを伝える。
11:05	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューシートを一度本人に戻す。戻ってきたシートを眺めてみて感じたことを全体で共有する。 	
11:15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苦労のパターンを探り、年表を作成する。インタビュー形式で進める。一人7分ずつで繰り返し起こっている仕組みを探るとともに、苦労度のグラフを使って年表を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「パターンになっている」とは、どのようなことかを、事例を示して理解しやすいように伝える。
11:30	<ul style="list-style-type: none"> ○ 帰ってきたインタビューシートを見ての気づきを全体で共有する。 ・詩と絵の本『today』⁶を聞く。 	
11:40	アンケート記入と次回の講座に関する連絡	

2 「当事者研究ワークシート」を用いた実践後のふりかえりアンケートの記述結果

(1) ふりかえりアンケートの記述・ワークシートの調査方法と倫理的配慮

ふりかえりアンケートは講座終了後に10分間設けて自由記述式で実施した。記入する前には、記述された内容を今後の研究で活用してもよいかどうかを参加者に確認し、また、記入する場合は無記名で構わない旨を伝えた。さらに、記入した「当事者研究ワークシート」については、任意での提出であることを伝えた。ふりかえりアンケートは全10部、「当事者研究ワークシート」は2部、回収した。

(2) ふりかえりアンケートの記述の結果

参加者のふりかえりの記述は下の表4の通りである。なお、一人の回答であっても、意味する内容が異なる場合は記述の項目を別にして記述している。全部で17項目に分かれた。

表4 第3回実施後のふりかえりアンケートの記述

記号	回答内容
A	何気ない悩みの中にも自分のコアな悩みがあってそれは今全然解決できてないけどそんな部分が自分にあるのだと頭の片隅においておけば来るべきいつかに心は備えておけるのだろうと思った。
b	今、自分が抱えている問題について深く考えることができなかったので、研究ワークシートを通じて考えることができて良かったです。
c	自分がいま抱えている悩みを人に話し、相手に文章にしてもらうことで、本当の悩みや原因が見えてくるのかなと感じた。
d	人に話すということで気分が軽くなるように感じられてよかった。
E	話していくうちに自分の「イライラするパターン」がなんとなく見えてきたような気がする。
F	自分のこだわりみたいなものを少し緩めていかないといけないかなあと少し思った。
G	自分の家事育児と夫の家事育児に対する納得感的なものをすり合わせてみたいなど思った。
h	自分の悪いくせから普段感じているふわっとしたストレスに具体的な中身がついて、普段こういふことでイライラしてるんだと、自分の感情を整理することができて良かったです。
I	毎日同じことでイライラしていることが分かった。
J	視点を変えたり、方法を変えたりして少しでも心に余裕をもって過ごしたい。
K	自分の理想を高く持ちすぎないように気を付けたい。
l	子どもは5か月でこちらの言いたいことがわかっているということを知って、今後はそれを意識して子どもと触れ合っていきたいと思いました。
m	研究に関しては、今はそんなに悩んでいるつもりはなかったのですが、自分にとっては睡眠時間がすごく重要で、睡眠がとれないことがストレスになっているんだなと分かりました。土日はたくさん寝ます。
n	今日、言葉にすることができて良かったと心から思いました！自分なりに整理したつもりになっていたことでしたが、話していくうちにまた気づくことが多くあり、話して受け止めてもらえたことで一区切りできたように思います。
o	自分のこと（気持ち）を整理することができてスッキリしました。おとなとおとなで、おとなのことを話すことが、こんなにも気分転換になるとは思いませんでした。
p	ために2人の寝かしつけをしてもらう等、夫に物理的に甘えてみようと思いました。
q	「おふろに入れない」分、子どもとの時間が増えたと思うようになりたいです。

全17項目のうち、感情・気持ちの整理につながったといった趣旨の記述が3つ(d, h, o)見られた。また、自らの感情が高ぶり「イライラ」する場面への気づきを記述したものが2つ(e, i)、睡眠時間の少なさがストレスになっていることへの気づき(m)が1つ見られた。

これらのほか、夫との関係を今後どのように形成していくかに関する記述(g, p)、子どもとの関係の在り方の変化への期待に関する記述(q, l)、自分の意識のもち方への気づき(f, j, k)の記述がみられた。これらは、今後の生活における方策、あるいは希望についての記述であり、当事者は、理想からではなくて等身大の自分を起点として「予測(知識)」を得たと考えられる。

3 当事者研究ワークシートの結果と分析

では、各参加者の悩み・研究にはどのような内容があり、そして、どのようなプロセスを経て気づきを得ていったのか。以下、2人の参加者の当事者ワークシートを基に分析する。

① Rさんの場合

下の表5と図2は参加者Rさんの研究テーマ及び苦労のエピソードの記述である。なお、個人の特定につながらないよう、子どもの年齢に関する記述は空白○として記述した。

表5 Rさんの研究テーマと苦労のエピソード

研究テーマ		【言いたいことが言えない人】の当事者研究
苦 労 の エ ピ ソ ー ド	最も古いエピソード	授乳を見られるのを断れなかった ・上の子(○歳)の時、産後入院中のお見舞い中、義母を追い出せなかった → 関係が悪くなることを恐れて抑えた
	最も印象的なエピソード	やめてほしいことを言えなかった ・引っ越しの時、触らないでほしい荷物を勝手に触られた(臨月) ・スペアキーを渡したら断りなく家に入ってきた ・義母に対して言葉を選んでいるうちに言えなくなる
	もっとも新しいエピソード	2人目でしょ! 1人目じゃないの!?といわれると(言葉に)詰まってしまった

主たる悩みは、自分と義母との関係にあり、主張したい事柄がありながらも伝えられない(でいる状態)にストレスを抱えていることが伺える。エピソードを見ると、悩みは長子の産後から継続している。

また、下の図2のRさんの苦労のパターンを見ると、「嫌な気持ちを伝えたい」と「色々考えると言わなくていいやとなる」との間にギャップがあり、これがストレスとなって蓄積していることが推察される。

Rさんは、視覚化された苦労のパターンを見たのち、「なんで言えないんだろう」とつぶやきながら自問していた。その後、もっとも古いエピソードにある「関係性が悪くなることを恐れて抑えた」という自分の「恐れ」の感情に気づき、

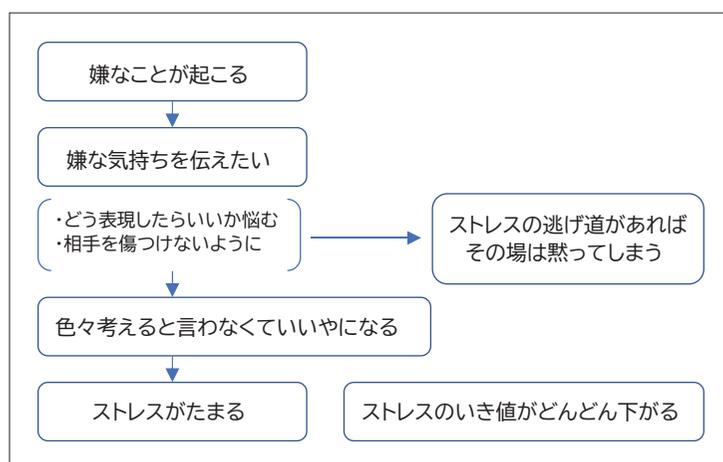


図2 Rさんの苦労のパターン

講座の最後には口頭で、「子どもを預けて助けてもらう部分があるから、（義母との）関係を悪化させないように気を遣っていたんだと気づきました」と述べていた。すなわち、講座受講前には、言いたいことが言えないでいる状況にある理由が不明瞭で、言えない自分への苛立ち、義母へのいら立ちを抱えていた状態であったが、本講座で自分を研究することを通して、義母との関係が「利害関係」にあることに気づき、理由があつての行動であったという自己理解・関係への理解が深まったと考えられる。

③ Sさんの場合

Sさんの研究テーマ及び苦労のエピソードを整理したものが下の表6である。

表6 Sさんの研究テーマと苦労のエピソード

研究テーマ		【理想とは違った愛情の分散に悩む、わたし】の当事者研究
苦 労 の エ ピ ソ ー ド	最も古いエピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・里帰り中・入院中に（猫がわたしを）探していたという話 ・帰宅後、（猫がわたしに）あまり寄り付かなくなった ・出産前のイメージと違った
	最も印象的なエピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・（猫に）ごはんがあげられなくて、泣き叫ぶ姿…20分放置 ・声掛けだけしながらいたが、その後いじけモード
	もっとも新しいエピソード	<ul style="list-style-type: none"> ・甘えてくる猫ちゃんを後回しにしてしまう ・ちょっと遠目で見ている。（赤ちゃんに）嫉妬している？ ・こどもを置いた後も無視される。 ・寝返りする赤ちゃんをせき止めていた一見守っている

*表内の（ ）内は、当事者から聞き取り、筆者が補足した。

主たる悩みは、飼っている猫と子どもの両者を、同時に等しくケアできないことにある。エピソードを見ると、「出産前のイメージと違った」「甘えてくる猫ちゃんを後回しにしてしまう」という記述がある。出産前には、猫と子どもの両者に等しくケアできている自分を思い描いていたが、産後はそのようにふるまえない自分がいるという理想と現実とのギャップが言語化されている。

Sさんの苦勞のパターンを整理したものが、下の図3である。ここでは、ケアできないタイミングが、より具体的になっている。乳児へのケアで「大変なとき」「手が離せないとき」に限って猫が「かまって欲しい」状況が生じており、また、パートナーとの「感覚のずれ」も悩みの原因の一つとして示されている。

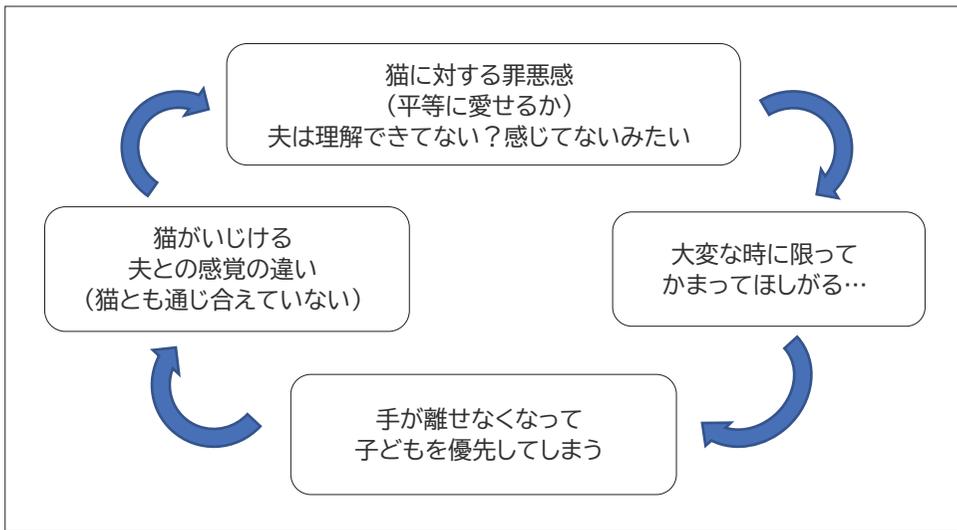


図3 Sさんの苦勞のパターン

Sさんは講座終了後のふりかえりのなかで、「猫と赤ちゃんへの愛情の分散の問題だと思っていたけれど、次の子が生まれてきたら上の子も同時に愛せるんだろうかっていう不安だったのかもしれないと気づきました」と述べていた。

4 全体考察

本稿ではまず、乳児期家庭教育学級への参加者の事前アンケートを基に、乳児の母親がどのような悩みごと・心配事を抱えているのかについて確認した。回答としては、離乳食のタイミング及び進め方といった乳児のケアに関する内容、あるいは、抱っこ・おんぶによる身体への負荷についての悩み、自分の余裕のなさによるパートナー及び子どもとの関係悪化についての内容が挙げられていた。

その後、第2回目の講座「子育て中も自分らしくいるために」後のふりかえりアンケー

トでは、「無意識」の「差別・偏見」をしていた自分への気づき、「ママはこうあるべきだ」という考えへの気づき、「自分の性別への思い込み」があったという気づきの記述があったことを確認した。この時点で参加者は講座前と講座後の自分を比較した上で、自己変容が生じてきていることを認識している。

そして、第3回目の講座「家族とのコミュニケーション 自分の生き方を考える」後のふりかえりシートには、「自分の悪いくせから普段感じているふわっとしたストレスに具体的な中身がついて、普段こういうことでイライラしているんだと、自分の感情を整理することができた」といった記述があり、自分の認知の枠組みを捉えなおすとともに、自分が感じていたストレスが何によって生じていたのかを、客観的に見つめる段階に至っている。

また、「相手に文章にしてもらうことで、本当の悩みや原因が見えてくるのかなと感じた」「大人と大人で、大人の話をすることが、こんなにも気分転換になるとは思いませんでした」といった記述があり、相互にかかわることによって変容した感覚が述べられており、相互変容が生じてきていることが伺える。

さらに、「ためしに二人の寝かしつけをしてもらう等、夫に物理的に甘えようと思いました」「自分の家事育児と夫の家事育児に対する納得感的なものをすり合わせてみたいなと思った」という記述がある。これらの記述は、自分が今担っているケア—子どもとパートナーへのケア—を再度、パートナーと話し合う必要性への気づきが示されていると捉えることができる。すなわち、家庭内におけるケアの「平等」について対話し変革していこうとするという意味で、政治性を含んでいる。

第3回目のふりかえりシートからは、乳児を育む女性の現状が示唆されている。ふりかえりシートには、「感情を整理することができた」「理想を高く持ちすぎないように気を付けたい」「物理的に甘えてみようと思う」といった記述があった。つまり、母親たちは、感情を整理することが難しい状況にあり、理想と現実との葛藤に悩みながらも、物理的に甘えられない環境にある、もしくは甘えることを自ら抑制し「生きづらさ」を抱えている、という現状が示唆された。

おわりに

依然として子どもへのケアが女性に偏りがちな日本において、女性たちはどのような境遇に置かれていると捉えることができるのか。不均等なケア責任で手いっぱいになるときに排除は生じる⁷。不均等なケア責任をいかに配分するかについて、自らも決定することができる事柄なのだ気づけることが、「配分への参加」の第一歩となり得る。

上記の意味で、構造的に排除されている女性にとって、公民館は、セルフアドボカシーの場として重要な機能を有する。セルフアドボカシー支援の目標は「あなたが自分のため

に発言し、自分の人生に影響を与える決定に参画できるよう力をつけること」であるとされる⁸。本実践で女性たちは、当事者研究を通して、家族、あるいは家族の周辺の人々とのかわりにおける自らの権利を見つめ直し、関係性を再構築するための学びを得ていた。

このように、公民館の行う事業は成人の学習活動・市民活動支援としての機能を有する。すなわち、母子保健とは異なる意義を有する内容であり、経費削減を理由として安易に統合するべきではない。また、対象者の属性が同じであることは、利用者にとって必要か不必要かを判断する基準にはならない。むしろ、人口減少に伴い住民による自治が求められる今だからこそ、当事者の声を拾い、当事者による活動を後方から支援していくパートナーとしての公民館の意義がある。

謝 辞

このたびの研究は、鴨井さんをはじめとする新潟市中央公民館職員の皆様からのご協力により実現いたしました。ご協力いただき、誠にありがとうございました。また、講座にご参加くださった参加者の皆様の同意なしには実現されなかった研究でもあります。ご参加及びご協力いただき、ありがとうございました。ここに記して感謝申し上げます。

注 釈

- 1 熊谷晋一郎 (2020) 『当事者研究 等身大のわたしの発見と回復』 岩波書店。
- 2 熊谷晋一郎+当事者 (2020) 『お母さんの当事者研究 本心を聞く・語るレッスン』 ジャパンマシニスト社。
- 3 前掲、熊谷晋一郎 (2020)、81 頁。
- 4 東京先端科学技術研究センター綾屋紗月氏作成「2019 年版当事者研究ワークシート」(©2019 当事者研究のやり方研究会) <https://www.japama.jp/wp/wp-content/uploads/2020/03/SelfStudy-WorkSheet2019.pdf> (2023 年 6 月閲覧)
- 5 「日刊新潟」https://tjniigata.jp/life/202012mamakids_pamasento/
(2022 年 7 月 2 日閲覧)
- 6 下田昌克 (イラスト) 伊藤比呂美 (翻訳) (2013) 『today』 福音館書店。
- 7 ジョアン・C・トロント (著) 岡野八代 (訳著) (2020) 『ケアするのは誰か? 新しい民主主義のかたちへ』 現代書館、41 頁。
- 8 竹端寛 (2013) 『権利擁護が支援を変える セルフアドボカシーから虐待まで』 現代書館、85 頁。